

石狩川中、下流域における 鳥類生息調査報告書

1980. 3

北海道自然保護協会

目 次

1. 夏期の陸鳥調査	1
(1) 調査方法	1
(2) 調査地 調査地 E	1
調査地 F	1
調査地 G	1
(3) 調査結果	2
(4) まとめ	3
2. 河口域における水、渉禽類調査	6
(1) 調査方法	6
(2) 調査結果	7
a. 種類数、個体数	7
b. ガンカモ類	7
c. シギ、チドリ類	8
d. カモメ類	9
3. 石狩川中、下流域で記録された鳥類リスト	13

この調査は石狩川に生息する鳥類に関する資料を得るため、北海道開発協会の委託を受けて北海道自然保護協会が行なったものである。調査は島田明英（北海道自然保護協会）が担当した。

1. 夏期の陸鳥調査

昨年度の夏期調査では神居古潭より下流の4か所で調査を行ない、石狩川中、下流域ではハシボソガラス、ムクドリなどの環境選択の幅の広い種が最も多く出現し、次いでコヨシキリ、ホオアカなどの草原性の種が多いことを明らかにした。また、下流域では草原性の種の占める割合が高いのに対し、中流域では草原性の種の割合は減少し、森林性の種が出現するという結果が出た。後者の結果は、言い換えれば、中流域では河川敷にまだ河畔林が比較的残されているのに対し、下流域ではほとんど破壊されて草原が河川敷の大部分を占めているということを意味している。

本年度の調査では、石狩川下流域河川敷において、植生の異なる3調査地を設定し調査を行なった。

(1) 調査方法

石狩河口橋上流の石狩川左岸（生振付近）に3か所の調査コースを設け、線センサスを行なった。調査コース上を時速1.5 kmで歩き、半径50 m以内に出現した鳥の種類、個体数などを記録した。半径50 mのセンサス範囲の外に出現した鳥については参考のため種類のみを記録した。

調査は1979年6月8日～7月27日の間に、各調査地について3回ずつ行なった。調査は悪天候は避け、午前4:30～8:30の間に行なった。

(2) 調査地

調査地の位置を図1に示す。

○調査地 E

石狩河口橋上流左岸のヤチハンノキ林内に調査コースを設けた。林床はヨシ、ミズバショウの生ずる湿地である。コース延長は2.2 kmである。

○調査地 F

調査地 E の河岸側に隣接して成立するヨシ草原（ヨシ-イワノガリヤス群落）内にコースを設けた。コース延長は1.6 kmである。

○調査地 G

札沼線鉄橋の下流左岸にある牧草地にコースを設定した。牧草は放牧によって短くなっている部分が調査面積の大部分を占めた。他に高基草原とヤナギ灌木林を含む。コース延長は1.0 kmである。

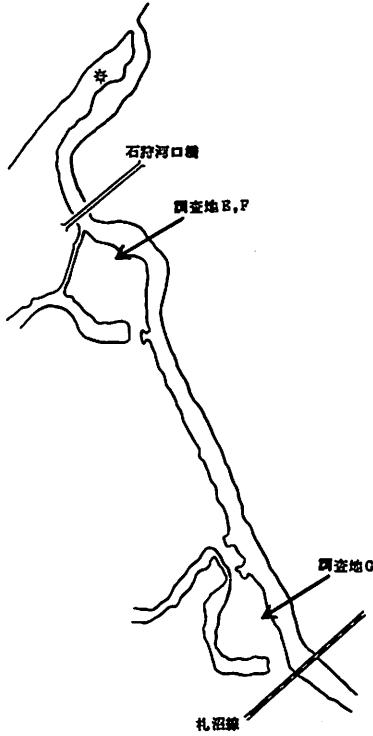


図1 夏期調査調査地

(3) 調査結果

表1に示した通り27種が記録された。(センサス範囲外に出現した種は除く。)調査地別の出現種類数と1ha当りの出現個体数は次の通りである。

調査地 E	19 種	4.61 羽/ha
調査地 F	9 種	2.42 羽/ha
調査地 G	17 種	3.83 羽/ha

種類数、密度ともにE調査地が最も多く、F調査地が最も少なかった。

各調査地において高い優占度を示した種は次の通りである。

調査地 E	コヨシキリ	20.2 %
	カワラヒワ	16.4 %
	アオジ	12.8 %
調査地 F	コヨシキリ	50.8 %
	カワラヒワ	15.5 %
	ハンボンガラス	13.8 %

調査地 G	ヒバリ	27.6 %
	ハクセキレイ	15.7 %
	ムクドリ	15.7 %

調査地 E はヤチハンノキ林であるが、林床はヨシまたはミズバショウになっており、二層の構造である。これに対し F、G の両調査地はそれぞれヨシ、牧草の単層の構造である。3 調査地の内では構造の複雑な E 調査地で最も密度が高かった。また出現種の構成も、調査地 E ではアカゲラ、アカハラ、シジュウカラなどの森林性の種と、コヨシキリなどの草原性の種が含まれている。

調査地 E ではコヨシキリが最も多く記録された。コヨシキリは調査地 F に見られるように、ヤチハンノキ林周囲のヨシ草原において多数生息していたが、林内にも多かった。しかし林内中央部の高木層の密な部分には生息しなかった。また林床がミズバショウの部分にも生息しなかった。ヤチハンノキ林内ではカワラヒワが多数記録された。

調査地 F ではコヨシキリが高い優占度を示し、全記録個体数の半分を占めた。他の出現種は大部分が上空通過の記録であり、このヨシ草原に生息する鳥はほとんどがコヨシキリである。他に

はセンサス範囲外ではあるが、ササゴイ、エゾセンニュウ、オオジュリンがヨシ草原内で観察された。

調査地Gではヒバリが最優占種であった。次いでハクセキレイ、ムクドリが多かった。この3種は草丈の低い牧草地の部分で主に記録された。高茎草原や疎なブッシュがセンサス範囲内に小面積あり、そこではノビタキ、コヨシキリ、ホオアカ、オオジュリンが記録された。

(4) まとめ

昨年度、本年度の夏期調査を通して明らかになった点をまとめてみたい。

夏期（6～8月）に石狩川中、下流域（神居古潭より下流）の線センサスにおいて記録された鳥類は44種である。これにセンサス範囲外に出現した種を加えると54種になる。この54種を目別に分類すると、コウノトリ目1種、ガンカモ目1種、ワシタカ目4種、キジ目1種、ツル目1種、チドリ目5種、ハト目1種、ホトトギス目1種、アマツバメ目1種、キツツキ目2種、スズメ目36種である。11の目にわたるが、スズメ目の種が最も多く、全体の67%を占める。

全種類合計の密度は1ha当り最低2.42羽から最高7.35羽まで開きがある。しかしこの数値には、大群で出現したハンボンガラスやムクドリなどが含まれているので、それらを除いて修正した値を求めると、1ha当り2.25～4.61羽となる。

次に、植生とそこに生息する鳥類の関係について気付いたことを述べてみたい。

F調査地はセンサス範囲のほぼ全域がヨシ草原であるが、ここではコヨシキリが多数記録され、1ha当り1.23羽、優占度50.8%であった。この調査地では他の出現種はほとんど上空通過を観察したものであり、ヨシ草原において記録されたのはコヨシキリが大部分であった。ヨシ草原とコヨシキリの結びつきの強いことがわかる。昨年度調査したA調査地の一部にあるヨシ草原においてもコヨシキリが多かったが、ここでは他にオオジュリン、ホオアカ、ノビタキも多く記録された。これは、A調査地のヨシ草原はF調査地のそれより乾燥しており、ヨシ以外の植物が多く侵入していてF調査地のヨシ草原ほど植生が一様でなく、より複雑な環境要素を含んでいるためだと思われる。ヨシ草原以外ではB調査地の草丈の高い牧草地においてコヨシキリが多く記録された。

ヒバリは草丈の低い牧草地を主とするG調査地で最も多く記録された（1.07羽/ha、優占度27.6%）。また、A調査地内の海浜草原、C調査地内の河川敷グラウンドのシバ草原においても多数記録された。ヒバリは草丈の低い草原を好むようである。

ハクセキレイはG調査地においてヒバリに次いで多かった（0.60羽/ha、優占度15.7%）。ヒバリと同様にこの種も丈の低い草地、河岸などで多く記録された。A調査地の海浜草原においても多数記録された。

② 上記以外の草原性鳥類であるノビタキ、ホオアカ、オオジュリンについては、どのような環境を選択するか明確にならなかった。

表1 夏期調査調査結果

	調査地名	E			F			G			
		n/ha	n/hr	dom	n/ha	n/hr	dom	n/ha	n/hr	dom	
1	ト ビ	0.08	1.2	1.6	0.04	0.6	1.7	0.03	0.5	0.9	n/ha : 1ヘクタール当りの個体数 n/hr : 1時間当りの個体数 dom : 優占度
2	ウ ズ ラ							0.07	1.1	1.7	
3	イ ソ シ ギ							0.03	0.5	0.9	
4	キ ジ バ ト	0.42	6.7	9.2	0.17	2.4	6.9	0.13	2.1	3.5	
5	カ ッ コ ウ	0.05	0.7	1.0	0.02	0.3	0.9				
6	ア カ ゲ ラ	0.06	1.0	1.3							
7	ヒ バ リ							1.07	16.8	27.6	
8	ショウドウツバメ							0.10	1.6	2.6	
9	ハクセキレイ							0.60	9.5	15.7	
10	ヒヨドリ	0.12	1.9	2.6							
11	モ ズ	0.17	2.6	3.6	0.02	0.3	0.9	0.03	0.5	0.9	
12	ノビタキ							0.13	2.1	3.5	
13	アカハラ	0.06	1.0	1.3							
14	エゾセンニュウ	0.29	4.5	6.3				0.03	0.5	0.9	
15	シマセンニュウ	0.05	0.7	1.0							
16	コヨシキリ	0.92	14.5	20.2	1.23	17.4	50.8	0.10	1.6	2.6	
17	ヒガラ	0.02	0.2	0.3							
18	シジュウカラ	0.38	6.0	8.2	0.06	0.9	2.6				
19	ホオアカ							0.23	3.7	6.1	
20	アオジ	0.59	9.3	12.8				0.10	1.6	2.6	
21	オオジュリン							0.17	2.6	4.3	
22	カワラヒワ	0.76	11.9	16.4	0.38	5.3	15.5	0.27	4.2	7.0	
23	ベニマシコ	0.26	4.0	5.6							
24	コムクドリ	0.08	1.2	1.6							
25	ムクドリ	0.15	2.4	3.3	0.17	2.4	6.9	0.60	9.5	15.7	
26	ハシボソガラス	0.14	2.1	3.0	0.33	4.7	13.8	0.13	2.1	3.5	
27	ハシブトガラス	0.03	0.5	0.7							
		4.61	72.3	100.0	2.42	34.3	100.0	3.83	60.5	100.0	

2. 河口域における水、渉禽類調査

(1) 調査方法

昨年と同様、石狩河口橋下流において水、渉禽類の集まる場所4か所を定点とし、各定点を巡回する形で調査を行なった。調査は水、渉禽類を中心としたが、移動途中を含め観察された鳥類すべてを記録した。観察には7倍双眼鏡と25倍望遠鏡を用いた。調査時間は特に限定せず、午前9時から午後6時の間に、2～4時間をかけて行なった。1979年8月3日から1980年1月27日の間に19回の調査を実施した。

調査定点は4か所設け、原則として4か所すべてを巡回することにしたが、12月以降の調査では積雪のため、左岸干潟と河口には行けなかった。そのため対岸より観察した。

調査地を図2に示す。各定点について次に述べる。

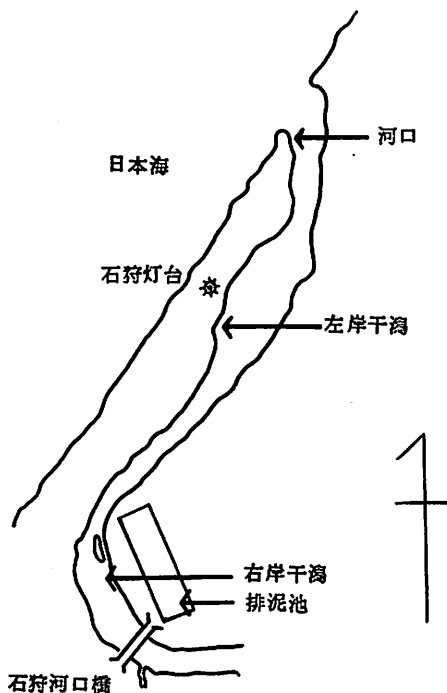


図2 河口域調査の定点

a. 左岸干潟

石狩川河口燈台横の左岸に泥質の干潟ができていて渉禽類、カモメ類などが採餌、休息していた。干潟の大きさは川の水位によって大きく変わり、冠水していたこともあったが最大時には長さ300 m 幅80 m位であった。

b. 河口

最下流の海にそそぐ部分である。河岸は砂利で干潟はできない。左岸から観察した。

c. 右岸干潟

石狩河口橋下流直下の右岸にできる干潟である。大きさは水位によって変わるが概して小規模で、最大でも長さ100 m、幅50 m程であった。

d. 排泥池

河口の河底の浚渫工事が行なわれており、浚渫した泥を捨てるために河口橋下流の右岸河川敷に

排泥池が作られていた。大きさは全体で長さ1 km幅300 m程であり、それを70 m四方程のマスに区切ってあった。池の状態はさまざまで、泥が完全に乾燥しているものから1～2 mの深さで湛水しているものまであった。一部のマスは干潟状になっていてシギ・チドリ類の採餌に適した状態であった。

(2) 調査結果

a. 種類数、個体数

調査結果を表2に示した。この調査で64種の鳥類が記録された。64種の内訳は、ガンカモ目10種、ワシタカ目5種、チドリ目30種、スズメ目15種、その他4種である。

種類数の季節変化を図3に示した。種類数は8月から9月にかけて増加し、9月9日にピークに達し30種を数えた。その後夏鳥の渡去、旅鳥の渡来の減少のため出現種類数は減っていき、11月以降は5～10種が記録されるだけであった。個体数の増減はカモ類の個体数に大きく影響されている。ピークは10月15日であるが、これはウミネコの多数個体出現によるものであった。このような出現種類数、個体数の季節的变化は昨年と同様の傾向を示した。

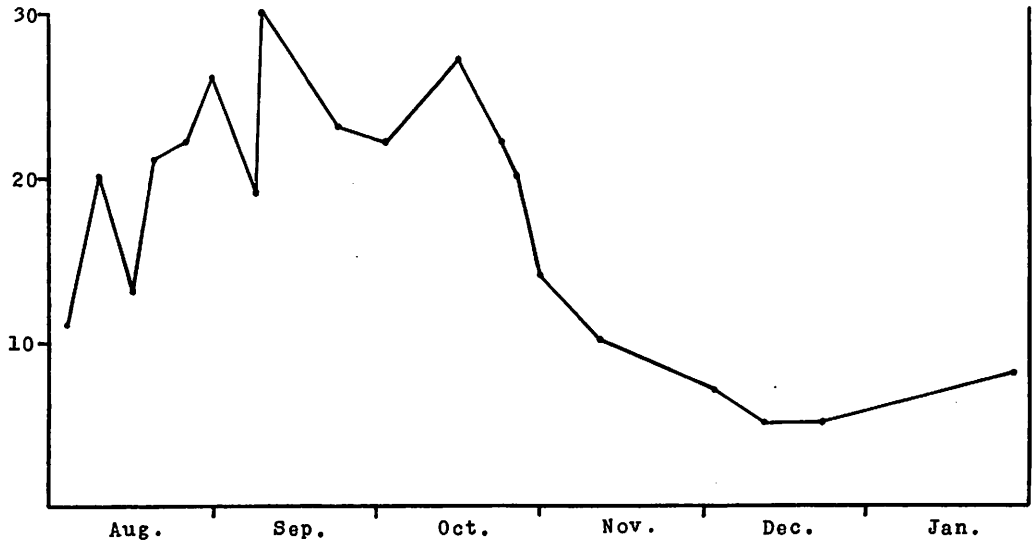


図3 河口域における水渉禽類調査 種類数の季節変化
(Aug.1979~Jan.1980)

b. ガンカモ類

種類数10種、最多観察個体数71羽であった。カモ類はその採餌習性などによって、水面採餌カモ(マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ)、潜水カモ(キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ)、アイサ(ミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサ)の3グループに分けられる。石狩川河口では10月以前は水面採餌カモが優占し、10月以降は潜水カモが優占した。図4は1978年、1979年の各グループの出現数の季節変化を示したものである。水面採餌カモは9月後半に集中して出現し、個体数は多い。潜水カモ、アイサは10月後半以降に出現するが個体数は少ない。

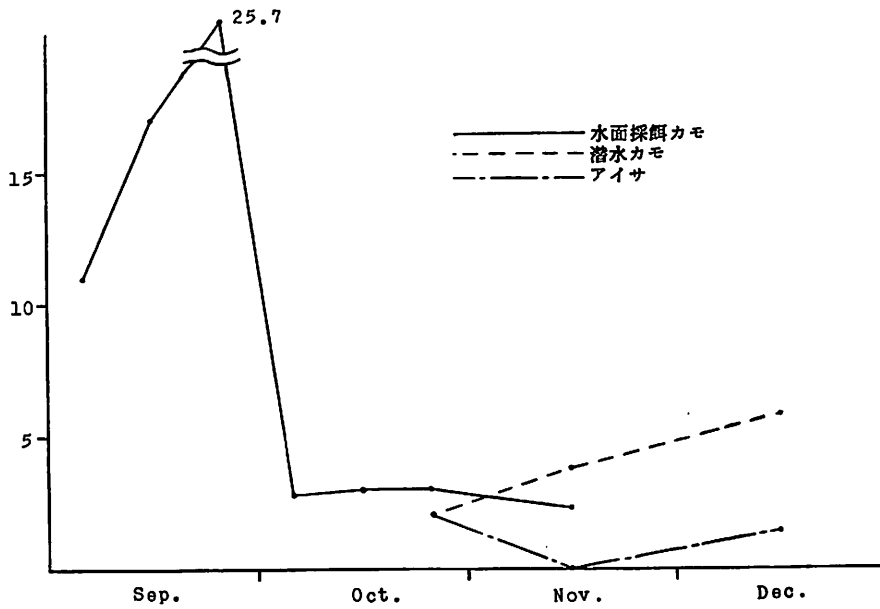


図4 水面採餌カモ、潜水カモ、アイサ個体数の変化
(調査1日当たり平均 1978,1979)

c. シギ・チドリ類

記録された種類数、総個体数の変化を図5に示した。種類数のピークは9月上旬にあり、

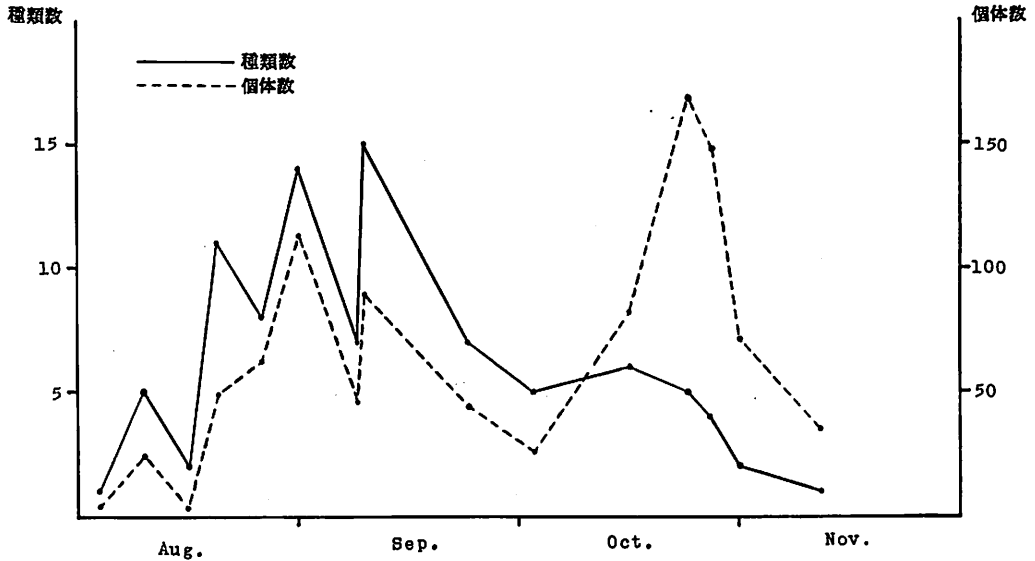


図5 シギ、チドリ類の種類数、個体数の季節変化
(1979)

個体数のピークは9月上旬と10月末にある。これらのピークの内容を種別に検討する。オグロシギ、メダイチドリ、オバシギ、エリマキシギ、オオソリハシシギの各種は8月下旬～9月中旬に出現個体数のピークがあった。また、ムナグロ、ウズラシギ、キリアイ、クサシギ、チュウシャクシギ、ホウロクシギはこの時期にのみ出現した。以上の種によって9月上旬の種類数、個体数のピークが成り立っている。一例としてオグロシギの記録数の変化を示した(図6)。一方、10月下旬の個体数のピークは、ハマシギが多数記録されたためである(図6)。

ハマシギは記録されたシギ・チドリ類中最も個体数が多く、シギ・チドリ類全個体数の41%を占め、10月下旬～11月上旬に出現数のピークがあった。

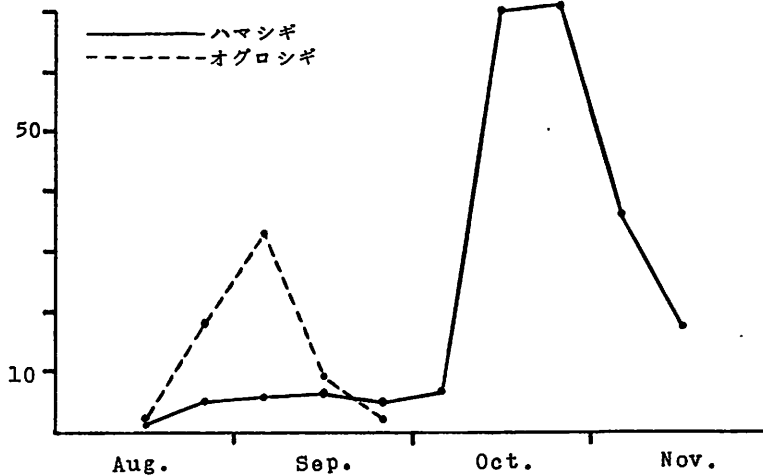


図6 ハマシギ、オグロシギの個体数の変化
(調査1日当たり平均 1978,1979)

d. カモメ類

8種が記録された。最も個体数の多かったのは10月15日の1274羽である。今回の調査で記録された種のうち、最も個体数の多いグループである。

群れを構成する各種個体数の割合は、昨年とほぼ同様の変化を示した。即ち、11月を境にそれ以前はウミネコが多く、12月以降はカモメが多かった。(図7)

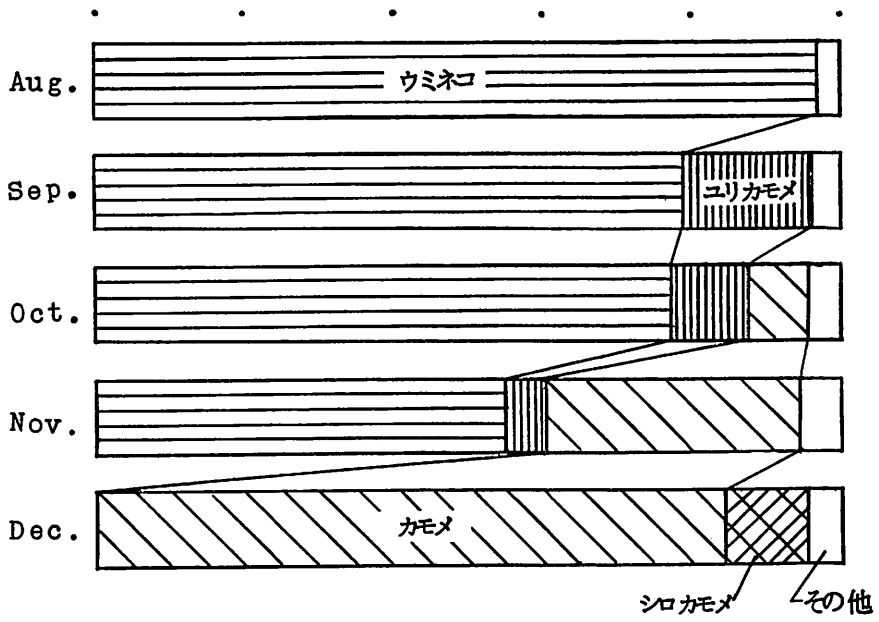


図7 カモメ類種別割合の変化(1978,1979)

表2 河口域における水渉禽類調査結果(1979年8月~1980年1月)

	8月						9月			10月					11月	12月			1月
	3	9	15	19	25	31	8	9	23	2	15	23	26	31	11	2	11	22	27
ウミウ									2		1	1							
アオサギ	9	5	6		8	26	6	6	5	1									
マガモ									23	2									
カルガモ									15		3								
コガモ							8	1	33	2									
ヒドリガモ														11					
オナガガモ														4					
キンクロハジロ															2	20			
スズガモ												4	5						
ホオジロガモ																	4	3	2
ミコアイサ																		1	
カワアイサ												9							
ミサゴ						1													
トビ	2	3	2		3	3	3	6	2	33	36	2	2	5					
チュウヒ									1										
チゴハヤブサ											1								
チョウゲンボウ													1						
ウズラ		1	1																
コチドリ				1															
メダイチドリ		2		5						2	1								
ムナグロ						1		2											
ダイゼン			2	2		1		5	4	3	4	9	18	4					
トウネン		1		22	15	31	1	1	25	13		1	6						
ウズラシギ					1	1													
ハマシギ				2	4	11		2	6	3	70	155	122	67	35				
オバシギ		3		1	4	8		1											
エリマキシギ					1		2	9											
キリアイ						2													
ツルシギ						1		1	4		1	2							
アオアシシギ	4					1		2											
クサシギ						1													
タカブシギ				1			3												

	8 月						9 月			10 月					11月	12 月			1月
	3	9	15	19	25	31	8	9	23	2	15	23	26	31	11	2	11	22	27
キアシンギ				4		1													
イソシンギ		4	1	2				1	1										
ソリハシンギ		14		6	4	5	3	4			1								
オグロシンギ				3	23	30	35	55	3										
オオソリハシンギ					10			1	2	3	2	5	2	2					
ホウロクシンギ							1	1											
チュウシャクシンギ						19		2											
タシギ								1											
ユリカモメ		8	2		13	7	9	1	66	143	78	5	73		1				
セグロカモメ				2											2	4			3
オオセグロカモメ											75	12	18	12	15	2	4		3
ワシカモメ																	1		
シロカモメ											3	9	8	17	2	32	2	13	4
カモメ	2			5	2					1	62	30	63	141	184	131	10	19	139
ウミネコ	294	289	665	885	364	726	248	323	130	353	1056	356	644	63	57				
アジサシ				33	13	11	6	11	2										
キジバト										2	1		2						
ヒバリ	2	1	3	2	2	6	2	1	3	19	2								
ハクセキレイ	2	4	4	4	4	5	4	2	11	14	3								1
ノビタキ	1	3	1				1	4	1	1									
ツグミ													1						
コヨシキリ	1	4						1											
ホオアカ	1				1					2		7							
カンラダカ											1	8	2	3					
アオジ		1									3		1	2					
オオジュリン		2	2	1	1	1	1	1	1	2	3								
カワラヒワ		12	5	4	3	13	2	5	6	58	32	11	9	2					
ベニマシコ											2								
スズメ		1						1			11	7	5						5
ムクドリ		6			1	66		75		7	2	78	22			90			
ハシボソガラス	4		17	5	19	5	24	4	9	9	10	3	4	9	3	5		11	5
ハシブトガラス		4		1	9					8	9	1	4		1	5			
総種類数	11	20	13	21	22	26	19	30	23	22	27	22	20	14	10	7	5	5	8

3. 石狩川中、下流域で記録された鳥類リスト

石狩川中、下流域の鳥類リストを表3に示した。このリストには、昨年度、本年度の夏期陸鳥調査、水、渉禽類調査の記録を含む。

表3 石狩川中、下流域で記録された鳥類リスト

	ベリカン目			ツル目	
	ウ科			クイナ科	
1		ウミウ	24		ヒクイナ
	コウノトリ目			チドリ目	
	サギ科			チドリ科	
2		ヨシゴイ	25		コチドリ
3		アオサギ	26		メダイチドリ
	ガンカモ目		27		ムナグロ
	ガンカモ科		28		ダイゼン
4		ヒシクイ		シギ科	
5		マガモ	29		トウネン
6		カルガモ	30		ウズラシギ
7		コガモ	31		ハマシギ
8		ヒドリガモ	32		オバシギ
9		オナガガモ	33		ヘラシギ
10		ハシビロガモ	34		エリマキシギ
11		キンクロハジロ	35		キリアイ
12		スズガモ	36		ツルシギ
13		ホオジロガモ	37		アオアシシギ
14		ミコアイサ	38		クサシギ
15		ウミアイサ	39		タカブシギ
16		カワアイサ	40		キアシシギ
	ワシタカ目		41		イソシギ
	ワシタカ科		42		ソリハシシギ
17		ミサゴ	43		オグロシギ
18		トビ	44		オオソリハシシギ
19		チュウヒ	45		ホウロクシギ
	ハヤブサ科		46		チュウシャクシギ
20		ハヤブサ	47		ヤマシギ
21		チゴハヤブサ	48		タシギ
22		チュウゲンボウ	49		オオジシギ
	キジ目			カモメ科	
	キジ科		50		ユリカモメ
23		ウズラ	51		セグロカモメ

52		オオセグロカモメ	72		ノビタキ
53		ワシカモメ	73		アカハラ
54		シロカモメ	74		ツグミ
55		カモメ	75		ウグイス
56		ウミネコ	76		エゾセンニュウ
57		アジサシ	77		シマセンニュウ
	ハト目		78		マキノセンニュウ
	ハト科		79		コヨシキリ
58		キジバト	80		オオヨシキリ
	ホトトギス目		81		センダイムシクイ
	ホトトギス科			シジュウカラ科	
59		カッコウ	82		ヒガラ
	アマツバメ目		83		シジュウカラ
	アマツバメ科			メジロ科	
60		ハリオアマツバメ	84		メジロ
	キツツキ目			ホオジロ科	
	キツツキ科		85		ホオジロ
61		アリスイ	86		ホオアカ
62		アカゲラ	87		カンラダカ
			88		シマアオジ
	スズメ目		89		アオジ
	ヒバリ科		90		オオジュリン
63		ヒバリ		アトリ科	
	ツバメ科		91		カワラヒワ
64		ショウドウツバメ	92		ベニマシコ
65		ツバメ	93		シメ
	セキレイ科			ハタオリドリ科	
66		ハクセキレイ	94		ニューナイスズメ
67		セグロセキレイ	95		スズメ
	ヒヨドリ科			ムクドリ科	
68		ヒヨドリ	96		コムドリ
	モズ科		97		ムクドリ
69		モズ		カラス科	
70		アカモズ	98		ハシボソガラス
	ヒタキ科		99		ハシブトガラス
71		ノゴマ			